

偶 感

松 酒 重 雄

当誌も巻を重ねてすでに7巻1号、逐年その成果が蓄積されてゆくことは、子供の成長を見守る親の感情にも似て実に楽しいものである。研究員諸氏の絶えざる努力を謝するしだいである。

日頃、売った買ったの一日に追われている門外漢の私が、高度の仕事に携っておられる諸兄にひと言もの申すのははなはだむずかしいことではあるが、詰らぬことを詰るように考えるのが研究者の仕事と思って、ごしんぼう願うこととする。

下手なゴルフを始めて10年、一番最初に教えていただいたことは、“Head up するなかれ”ということであった。これは、球が当たらない、曲る、延びない、等々いろいろ悪い原因となる。

しかしながら、次から次へとより高度な技術を習得していくうちに、あまり条件が多過ぎて、つい基礎的なことを忘れてしまう。ところで、最近どうもうまくないというのでなぜかと反省してみると、結局、種々条件はあるが、やはり“Head up するなかれ”ということが何にも増して一番大切なことであるという結論にもどった。テレビ解説でも野球の打者の批判は、この Head up である。ボールを打つという競技にはどうもこれは絶対条件らしい。

ところで、販売上日頃当面する技術上の問題では品質上のことが多いのであるが、それはまた分析値で議論されることが多い。そして、この分析値はしばしば零コンマ以下4位とか5位が問題になる。ところが、これ位の小さい数字になると分析技術上のいろいろの問題があってその項目が0.00045が正しいか0.00046が正しいかは微妙な問題で、どちらとも言いがたいもののようにも聞く。これをどちらが正しいかについて神経質に論議することは馬鹿げているとも思われる。しかし、それだからと言って、分析する作業がいかげんなものであってはならず、それは可能な限り正確なものでなくてはならないはずである。地味な仕事ではあるが、これがいかげんなものであっては、品質問題はいくら論議しても意味がない。

研究において、そのテーマを基礎から始めて逐次その目的に近づける場合、その過程をいかに妥当な考え方で進めても、時に基礎に誤ないし不正確さがあった場合、その研究は混乱に陥るであろうし、また、時間的浪費を余儀なくされるであろう。

わかりきっていることではあるが、それを忘れるのが人の常、しろうとながらに、研究員に対するすすめの言葉は“時々 Head up を思い出したまえ”である。

(取締役販売本部長)